

ジェンダーから見る辞書記述 ——新語収録の状況



石川有香

「名誉教授」の講演

先日、英語教育の講演会に参加した。司会者は、講師のタイトルに professor emerita を使用していた。『ジーニアス英和大辞典』で調べると、emerita は「〈女性教授が〉名誉退職の」とある。そもそも男性に比べると、女性研究者の数は非常に少ない。その中でも、定年退職まで勤め上げた名誉教授となると、なかなかお目にかかることができない。そのため、名誉教授と言えば、ついつい男性形の emeritus を思い浮かべてしまっていた。司会者の講師紹介にハッとさせられた瞬間だった。

手元の辞書を見てみると、男性形の emeritus の欄には、語源がラテン語であるために、名詞で使用する場合には複数形が emeriti となることが示されていて、用例も記載されている。一方で、女性形の emerita は見出し語にも採用されていない。ラテン語の語源を持つ「同窓生」は、男性形の alumnus（複数形 alumni）と女性形の alumna（複数形 alumnae）が異なることがよく知られているので、類推できる可能性があるとは言え、何とも落ち着かない気分になった。今後、女性の名誉教授が増えてくれば、emerita を見出し語に採用する辞書も増えるのだろうか。

女性の敬称

まずは、現行の英語教科書を見てみよう。中学校 1 年生用の英語教科書では、女性の英語の先生には Ms を、男性の英語の先生には Mr を使用しており、バランス良く男女の敬称の導入がなされている。学年が進行して、登場人物が増えてくる

と、Mrs や Miss を使用した人物も描かれて、女性の敬称の種類が増えてくる。そこで、Mrs を割り当てられた女性をよく見てみると、必ずと言っていいほど、「母」として描かれていることがわかる。いったい、教科書では、Ms/Mrs/Miss をどのように指導することが期待されているのだろうか。

辞書で確認すると、Mrs は、既婚の女性に用い、Miss は、未婚女性に用いると記載されている。さらに、Ms は、既婚・未婚を区別したくない場合に用いるとある。しかし、こうした辞書定義に従って、Ms/Mrs/Miss を切り分けて提示しようとするれば、英語教科書の中の女性達は、語義を狭く限定したステレオタイプの存在となってしまっていて、現代の多様な家族形態にはそぐわないように思われる。そもそも、女性に対して、3 種の敬称を使い分ける必要があるだろうか。

遡れば、Ms が英語に取り入れられたのは、フェミニズム運動が盛んになった、1970 年代であった。当時、多くの職場で、女性は、「結婚すれば退職する」ということが決められていた。結婚後も働き続けることができる男性が、生涯 Mr を使い続ける一方で、婚姻状態に基づいて、Miss と Mrs で女性を二分する英語のありようそのものに疑問が呈された。激しい論争が繰り広げられる中で、最初に、見出し語として Ms を取り入れたのが、中学生を対象とした *American Heritage School Dictionary* であったとされる（南出，1998，p.93）。学習者用辞書は、一般的に、大辞典よりも規範性の高い記述が求められるためであ

ろう。翌年の1973年には、国連でも Ms の採用がはじまり、今では、男女を平等に扱う Ms の使用は広く受け入れられている。

『ジーニアス英和辞典』は、女性差別を含め、さまざまな差別とことばの問題に早くから取り組んできた学習者用英和辞書のひとつであるが、女性の敬称に関して、「最近では未婚・既婚を区別せず Ms.、《主に英》Ms を使う傾向がある」と規範を示してくれている。しかし、Mrs や Miss は、いまだに高頻度で使用されており、現在では、女性の敬称が Ms の 1 語に集約される見通しは立っていない。

新基準としての Mx

こうした中、昨年、大辞典の *Oxford English Dictionary* が、Mr や Ms に代わる敬称として、あらたに、Mx (mix または mux と同音) を辞書に取り入れた。Mx は、性を特定しない人、されたくない人に対する、gender-neutral な敬称とされる。すでに、英国では、役場や企業が採用を進めており、Mx の使用は急速に増えているという。今年は、米語系大辞典の *Merriam-Webster Unabridged Dictionary* (以下、MWUD) も、Mx を収録している。Mx の初出は1977年とされるが、性の多様性への関心が高まった近年、注目されるようになった。生物学的性別のみに基づいて、人間を Ms と Mr に二分する英語のありように、疑問が呈されたのである。40年前にフェミニストが取りこぼした視点であったと言える。

実際、アメリカ版の Facebook では、現在、アカウントの登録時に選択可能な性が多様化している。例えば、transgender 他、男性や女性という既存の社会的枠組みに当てはまらないことを表す genderqueer や、反対に、生まれながらの性別とジェンダー・アイデンティティが一致しており、社会的文化的性別役割を担う準備があることを表す cisgender など、数多くの選択肢が用意されている。上記の MWUD は、すでに、gender-

queer や cisgender も見出し語に加えている。

「マイ代名詞」の選択

最後に単数形の they 代名詞を見ておきたい。G5は、性を区別しない単数名詞の照応について、「…he で受けるのは性差別の観点から避けられるようになり、現在ではこのような「単数の they」がよく使われる。しかし、堅い書き言葉・話し言葉では they を避けて he or she, she or he, s/he を使うことこともまだ少なくない」としている。たしかに、近年、単数の they を選択するニュース・メディアが増えている。さらに、大学の新入生用ガイドでは、これから先の大学生活において、どのような代名詞を使って呼んで欲しいかを、学生が自身で選択して登録する Preferred Gender Pronoun (PGP) 制度も散見されるようになった。ここでは、he や she、単数形の they の他、ze や ey のような新しい代名詞が選択可能な大学もある。これらの新代名詞が辞書に記載される日も、近いのかもしれない。

辞書を用いた学習活動

社会はめまぐるしく変化し、社会を映す言葉も変化する。辞書は、社会を映す鏡であると同時に社会の鑑ともなりえる。日本語の「名誉教授」や「先生」「氏」などの敬称は両性に使用できるので看過されがちであるが、英語辞書を眺めていると、人を何と呼ぶのか、人から何と呼ばれたいのかという選択の中に、我々がジェンダーをどのように捉えるかという構図が見えてくる。既存の枠にはめ込むのではなく、造語によって多様性を受け入れていく、ことばの柔軟性に感嘆する。教室では、辞書を使って、ラテン語の語源を紹介することも、新しい英語の語彙を紹介することも、ことばへの関心を高める良い学習活動となりそうだ。

◆参考文献

南出康世. (1998)『英語の辞書と辞書学』大修館書店

(いしかわ ゆか・名古屋工業大学教授)